

語源覚え書き 2

河野庸二

はじめに

本編は前回と同じ趣向で、必ずしも英語に限定することなく、語源にまつわる貴重と思われる情報を、人づてに、また書籍から、要するに雑多な情報源から拾い集めて整理し、それにコメントを加えながら、文字どおり覚え書きとして綴ったものである。したがって各章の配置はどうでも別にかまわないうけであるが、今回は一応アルファベット順に配列してみた。情報源とした書籍の中には、筆者にとってまさしく言語資料蒐集の旅に他ならぬ海外渡航の際に求めたものもある。そういう意味でも本編は筆者のフィールド・トリップのたまものなのである。

After You, My Dear Alphonse

衝撃作 *The Lottery* 『くじ』(1948)で知られる米国の女流作家 Shirley Jackson (1919-1965) の作品に *After You, My Dear Alphonse* (1943) と題する掌編がある。一風変わったタイトルであるが、調べてみると興味深い数々の事実が浮かび上がってくる。(じつはこのタイトルには裏の意味が籠められているのであるが、そのことについてはここでは触れない。) 要するに、登場する二人の少年たちが事ある毎にこのフレーズを繰り返して先を譲り合い悦に入る場面が、冒頭と中間部そして結末の部分と、都合3回出てくるのである。

Mrs. Wilson was just taking the gingerbread out of the oven when she heard Johnny outside talking to someone.

“Johnny,” she called, “you’re late. Come in and get your lunch.”

“Just a minute, Mother,” Johnny said. “After you, my dear Alphonse.”

“After you, my dear Alphonse,” another voice said.

“No, after you, my dear Alphonse,” Johnny said.

(Shirley Jackson: *After You, My Dear Alphonse*)¹⁾ (下線筆者)

“Johnny,” Mrs. Wilson said. “go on and eat your lunch.”

“Sure,” Johnny said. He held out the dish of scrambled eggs to Boyd.

“After you, my dear Alphonse.”

“After you, my dear Alphonse,” Boyd said.

“After you, my dear Alphonse,” Johnny said. They began to giggle.

(ibid.) (下線筆者)

“After you, my dear Alphonse.” Johnny said, holding the door open.

“Is your mother still mad?” Mrs. Wilson heard Boyd ask in a low voice.

“I don’t know,” Johnny said. “She’s screwy sometimes.”

“So’s mine,” Boyd said. He hesitated. “After you, my dear Alphonse.”

(ibid.) (下線筆者)

ところでこのフレーズについては、Eric Partridgeの『キャッチフレーズ辞典』に関連する項がある。

a f t e r y o u , C l a u d e - n o , a f t e r y o u ,
C e c i l Characterizing an old-world, old-time, courtesy, this exchange of civilities occurred in an ‘ITMA’ show, produced by the BBC in (I seem to remember) 1940. Although it was already, in 1946, slightly obsolescent, yet it is still, in the latish 1970s, far from being obsolete. The Canadian version, as Douglas Leechman informed me in 1959, is a f t e r y o u , m y d e a r A l p h o n s e - n o , a f t e r y o u , G a s t o n , with variant a f t e r y o u , A l p h o n s e (Leechman, January 1969, ‘In derision of French bowing and scraping’)—and was, by 1960, slightly obsolescent, and by 1970, very; current also in US,

where, however, it often took the form, y o u f i r s t m y d e a r A l p h o n s e (or A l f o n s o). Note that all of them were spoken in an ingratiating manner. (以下略) (Eric Partridge: *A Dictionary of Catch Phrases*)⁽²⁾

(下線筆者)

つまり第2次大戦中のBBCの人気ラジオ番組‘ITMA’ show⁽³⁾の中で人気を博したフレーズ after you, Claude—no, after you, Cecilに対して、カナダからの投稿者Douglas Leechmanが、「カナダでもそれに似た言い方があり、それは after you, my dear Alphonse —no, after you, Gaston である。after you, Gaston という代わりにafter you, Alphonse と言いつ返し場合もある。また、このフレーズはカナダのみならず米国においても行われている。」という指摘をしたのである。イギリス人であるパートリッジはやはりカナダや米国の事情にはそれほど強くないため、リーチマンの投書を貴重な情報として全面的に採用したのであろう。ところがこのリーチマンなる人物もどうやら素人の域を超えない好事家にすぎないと見えて、after you, my dear Alphonse —no, after you, Gaston のそもそもの由来を知らず、Alphonse, Gastonがいずれもフランス系の名前であるところから、米国起源ではなくカナダ起源のフレーズと信じ込んでいたらしい。この辺の事情に関しては、Morris夫妻の『語源・句源辞典』が明確な解答を出してくれている。同書にはan Alphonse and Gastonの項があり、そこには次のような記述がある。

an Alphonse and Gaston comes from an old comic strip featuring two Frenchmen who tried to outdo each other in politeness. Each strip would end with them saying to each other: “After you, my dear Alphonse!” “No, after you, my dear Gaston!” When a sportscaster reports that two players have “pulled an *Alphonse and Gaston* !” he is referring to a play in which two outfielders running to catch the same fly each pull back to let the other make the play—with the result that the ball falls safe between them. (*Morris Dictionary of Word and Phrase Origins*)⁽⁴⁾ (下線筆者)

さてその comic stripが何時ごろ書かれたもので、作者が誰であるかにつ

いては、少し昔のエンサイクロペディアを調べればよい。(最新版では *Op per*の項がすでにはずされている場合がある。)

OPPER, FREDERICK BURR, 1857-1937, U.S. illustrator, was born in Madison, Ohio. He contributed humorous cartoons to Frank Leslie's publications, 1877-80, was an illustrator for *Puck*, 1881-99, and after 1899 was associated with the William Randolph Hearst papers for which he created the comic strips *Happy Hooligan*, *Alphonse and Gaston*, and *Maude the Mule*. Opper illustrated *Bill Nye's Comic History of the United States* (1894), Finley Peter Dunne's *Mr. Dooley's Philosophy* (1900), and Mark Twain's *Editorial Wild Oats* (1905). (*Encyclopedia Americana*, 1965)⁶⁾ (下線筆者)

これまでにあげたいいくつかの資料からの情報を総合、整理すると次のようなものになるであろう。今世紀初頭に米国の新聞王ハースト系の新聞に漫画 *Alphonse and Gaston* を連載したのはフレデリック・バー・オPPERであり、この漫画のキャラクターである二人のフランス人によって繰り返されるせりふ、"After you, my dear Alphonse!" "No, after you, my dear Gaston!" は一種の流行語になって世間に広まり、合衆国はおろかカナダにおいても行われた。やがてその由来が忘れられると、Gastonの方が消えて、"After you, my dear Alphonse!" の単なる反復になる場合も少なくなかった。しかもこれらのフレーズは面白いことに一時的な流行語として廃れることなく、一種の常套語句となつてのちのちまで行われた。既述のシャーリー・ジャクソンの掌編はフィクションではあるものの、時代の風俗を如実に映し出しているがために、このフレーズが1943年の時点でも行われていたことの傍証として貴重な資料になっているのである。

BP機_(レ-)とBB機_(レ-)

観光を兼ねたフィールドワークでたびたび中国を訪れる現宇部短期大学教授諸井耕二先生から質問の電話を受けたことがある。「もしかしてポケットベルのことを英語で、たとえば *bell in the pocket* という言い方をしないだろうか。というのは中国でもポケットベルが大流行なんだが、BP機_(レ-)と呼

ばれているのでね。」つまりPB機(レ-)なら pocket bellの頭文字をとった略語として納得がいくのだが、PとBの順序が逆になっているのが理解できないというのである。その時点では「BP機(レ-)」のことは筆者には初耳だったし、当然即答できることではなかった。「早速調べてみましょう」と約束して受話器を置いた。正直なところ pocket bellが和製英語かも知れないということなどそれまで思ってもみなかった。そこで最新の国語辞典類を片っ端から調べてみたが、「英語の pocket bellから」という通り一遍の説明が出ているだけで一向に埒が明かない。そこで大学の中国語の先生に尋ねてみても、「さあ、どうしてでしょうね。(日本在住の)王先生ご自身頭をひねっておられます。」という返事だった。その後新聞紙上にもBP機(レ-)のことは載るようになったが、その語源については一言も触れられたためしがなかった。

話は変わるが、筆者は十数年前『サブウェイ・パニック』というアメリカ映画を見たことがある。当時はまさにパニック映画大流行の時代で、筆者の見たこの映画もそのブームの中で製作されたものであった。ところでタイトルはオリジナルのままであるかと思えば、じつはそうではなく、*The Taking of Penham 1, 2, 3*というのであった。直訳すれば『ペナム1, 2, 3番線乗っ取り事件』とでもなるであろう。つまり筆者が言いたいのは、pocket bell といいい subway panic といいい、うっかりするとまんまと騙されそうなくらいよくできた和製英語ではないかということである。

ところで肝心のBP機(レ-)の語源であるが、諸井教授の質問に対して正解を出すためのヒントは思わぬところから与えてもらうことになった。折も折朝日新聞、日曜版の連載コラム「いんぐりっしゅ漫歩」(平成6年4月24日付け)に「ポケベルBeeper, Pager」と題するまさにそのものずばりの記事が掲載されたのである。以下に引用するのはその一節である。

移動電話と同じように人気のあるのがポケベルだ。移動電話と違って双方向通話(two-way conversation)は不可能だが、連絡を取り合うには問題ない。器具自体が小さく、軽いのが受けるのだろう。だが手軽なだけに、業務上頻繁にこれで呼びだされる人にはいつも同情している。

ポケベルはその名の通り「ポケットに納まるベルだが、英語では beeper, pager などと呼ぶ。beeperは「ビーッ」という車の警笛、電気器具の警告音などを表す「beep音を出す装置」の意味だ。pagerの方は本や新聞のページとはまったく無関係で、ホテルやクラブで「(名前を呼んで)人を探す(人)」pageからきている。“Paging Mr. So-and-so.

“Please come to the front desk. We have a message for you.”
(一さん、フロントにおいでください。伝言がございます) というのを聞いたことがおありだろう。このpageは「名を呼んで人を探す」こと。「案内係」の意味もある。

中国でポケットベルがBP機_(レ)と呼ばれる理由はこの記述からじゅうぶんに察しがつく。まさしく「beep音を出す装置」の意味でBP機_(レ)といているに違いないのである。ところでこの話にはさらに後日談がついている。その後諸井教授から最近の南中国の旅のアルバムを見せていただいたところ、街頭の広告に〈BB機〉と書いてある。「BP機_(レ)でなくBB機_(レ)となっていますね。」尋ねてみると「どうやら揚子江を境として、北と南でBP機_(レ)とBB機_(レ)に分かれるらしい。」とのことだった。そうだとすれば、北部ではbeepという原音にやや忠実にBPと呼び(因みにこのプロセスはgeneral purpose「万能」の頭文字GPに由来するとされるjeepなる名称の成り立ちを連想させる)、南部では「ビー、ビー」という断続音を模写してBBと言っているのであろう。要するにbeeperは、ポケットベルに限らず「ピーッという音をたてるもの」であれば何でもいいわけで、だからこそ英和辞典類にbeeper boxの項があって「ポケットベル」はその訳語として出ているのであるが、実際にはおそらく一語で言えるbeeperの方が使われているのであろう。

ゼロ弾きのゴーシュ

宮澤賢治の作品の大きな特徴の一つとして彼独自の造語があげられる。豊富な擬声語、擬態語の類はさておき、固有名詞だけを例にとっても、〈イーハトーヴ〉、〈グスコープドリ〉、〈オッペル〉(最後の例はOpfer「犠牲」を意味するドイツ語によるとされるがどうであろう。)等々、往々にして国籍不明のものがあつて、それらが彼の童話や詩の一部に日本という枠を超えた一種独特の雰囲気とコズモポリタンの性格を与えていることは否めないであろう。もっとも、やはり国籍不明の物語である『銀河鉄道の夜』に出てくる〈ジョバンニ〉や〈カムパネルラ〉などは明らかにイタリア名だから賢治の造語とは言えない。もう一つの特徴は、よしんばそれらがドイツ語やイタリア語であったにせよ、その名の持ち主は相変わらず国籍不明の人物になっている点である。ところで『ゼロ弾きのゴーシュ』の〈ゴーシュ〉の場合はどうなのか。うかつにも筆者は三木原浩史著『シャンソンの四季』(彩流社

刊)という本に出会うまでは、〈ゴーシュ〉の場合も、漠然と賢治独特の造語の一例としか考えていなかった。ところが同書の第1部、第3章「秋 私の心はヴァイオリン (*Mon Coeur Est un Violon*)」の中に次のような一節があった。

…そんな少年のわたしにも、やがて、ヴィオロンがヴァイオリンであると知る日がやってきましたが、いぜんわたしの心のなかでは、ヴァイオリンはヴァイオリンでなく、ヴィオロンでありつづけてきました。ちょうどそれは、おさないころ、宮澤賢治の『セロ弾きのゴーシュ』を読んでいたらい、セロはセロであってチェロではなくなってしまった、そのことに似ているかのようです。

ヴィオロン、セロ、ゴーシュ、——少年の日にはわかろうはずもありませんでしたが、これらはすべてフランス語でした。え、セロはフランス語じゃない、ですって?……そう、そう、これはたしかにフランス語ではありませんでした。フランス語では「ヴィオロンセル」(violoncelle)でした。でも、本場イタリア語の(violoncello)をフランス語風に読めば、ちゃんと「ヴィオロンセロ」になってしまうところが楽しいではありませんか!そんなわけで、ほんとのところ日本語で「セロ」ともよぶその正しい由来のほどは知りませんが、やはりなんとなくフランス語風のかおりがしてきます。

そしてゴーシュ。《Gauche》とつづって、こちらはもう、れっきとしたフランス語です。もともと形容詞で、「左の、左側の」という意味ですが、そこから派生して、「ぎごちない、不器用な」という意味をおびるようになります。ですからゴーシュとは、「ぶきっちょな男」という意味なんでしょうね。……(三木原浩史著『シャンソンの四季』)⁶⁾
(下線筆者)

ここには「ゴーシュ」の語源に併せて、日本語「セロ」の語源説が述べられているが、幾分強引な論法であって、特に「ゴーシュ」の場合、賢治が実際にフランス語を意識して名付けたか否かは疑問である。むしろ彼独自の造語と考えた方が楽しいのであるが、フランス人という設定ではないにせよ、ゴーシュを「ぶきっちょな男」の意味のフランス語と解釈すれば、たしかにこの童話の内容に照らし合わせてみていかにも辻褄が合うのである。

Parthenope

Izaac Asimovはその名著の一つである *Words from the Map* (『世界の地名』) の “Naples” の章において「かつてパルテノペ (乙女の顔) という都市があった場所に新しくできた都市がナポリである。」と言いながら、パルテノペの由来については一言も触れていない。これでは片手落ちの感がしないでもない。

The simplest name for a new town is “New Town” and examples of this were present in ancient times. About 600 B.C. the oldest Greek settlement in Italy established a new town a few miles away, on the abandoned site of an older one called *Parthenope* (pah-then’o-pee), which, in Greek, means “maiden’s face.” The new town was named *Neapolis* (nee-a’po-lis), meaning “new town.” (Izaac Asimov: *Words from the Map*)⁷⁾ (下線筆者)

ナポレオンの時代に、当時ブルボン朝の支配下にあったナポリ王国がほんの一時期共和制をしき、*Republica Parthenopea*と称したのもこのいきさつがあるためであり、それはナポレオンの懐古趣味によるものだとアジモフは書き添えている。ところで「パルテノペ」の名は処女神パラス・アテネをまつる神殿「パルテノン」と関連があるのはいうまでもないが、それがギリシア神話の女怪サイレンの一人の名であることはブルワーの名著『故事伝説辞典』によって教えられた。とにかく複数いたとされるサイレンたちの名前にまで言及している辞典はそうざらにあるものではない。

In Homeric mythology there were but two sirens; later writers name three, viz. PARTHENOPE, Ligea, and Leucosia; and the number was still further augmented by others. (*Brewer’s Dictionary of Phrase and Fable*)⁸⁾

同書のParthenopeの項には、アジモフの記述の不備を補う簡潔で要を得た説明が見られる。つまりナポリの前身であるパルテノペはユリシーズに失恋して身を投げたサイレンパルテノペのなきがらが流れついた場所だったというのである。

Naples; so called from Parthenope, the SIREN, who threw herself into the sea out of love for ULYSSES, and was cast up in the Bay of Naples. (ibid.)

siren

今日の警報機サイレンがギリシア神話に出てくる女怪セイレーン *Seiren* に由来することは周知の事実である。ところがどういう経緯でそうなったかについては、明確に説明している辞書は稀である。この点について『オックスフォード英語語源辞典』は簡単ながらさすがにかなり核心に触れた説明を与えている。

(classical myth.) fabulous female monster having an enchanting voice XIV; dangerously attractive person XVI(Sh.); instrument for producing musical tones, invented by Cagniard de la Tour, 1819 (hence, one for making signals). (*The Oxford Dictionary of English Etymology*)⁹⁾ (下線筆者)

つまり19世紀の初頭にカニヤール・ド・ラ・トゥールの発明した音響装置は警報用ではなく、《楽音を発するもの》であったことを指摘しているのである。但しこれだけではギリシア神話の女怪と当初の音響装置とのつながりがもう一つはっきりしない。ところが、1988年の春、最初の渡米の際、今や観光名所の一つになっているUCLAの生協の、書籍部で買い求めた本の一冊に注目に値する記述を見出したのである。この本の強みは何といっても、『1820年度の年鑑』といった古文書の記事等、確固たる資料を引用している点である。

Siren now shriek terribly as they warn of danger, their name evoking the Sirens who sang sweetly while they lured victims to danger and destruction. The Greek word *seiren*, the ultimate source of our word *siren*, denoted mythical creatures, part women and part birds, who by their sweet singing enticed sailors to their death on rocks surrounding the shore. The use of the word *siren* with which our ears are most familiar originated when the

term was applied to an acoustical device invented in 1819 by the French physicist Charles Cagniard de la Tour. This device produced musical tones, and because it was “sonorous in the water,” according to the Annual Register of 1820, it was called a siren . A larger device used on steamships to emit fog signals was given the same name, and the term was later extended to devices producing similar sounds, including the ones shrilling through our neighborhood. (*Word Mystery & Histories From Quiche to Humble Pie* By the Editors of The American Heritage Dictionaries)⁹⁰ (下線筆者)

即ちシャルル・カニヤール・ド・ラ・トゥールの発明した音響装置は「水の中でいい音がする」ところから、「サイレン」と呼ばれたというのである。(たしかに妙なる歌声で舟人を惑わした女怪サイレンは海中に浮かぶ島に住んでいたことになっている。)したがってこの装置は何らかの形で水が使われていたものらしいが、1920年代に出た古い「目で見える百科事典」である *I See All* (の復刻版)に出ているカニヤール・ド・ラ・トゥールのサイレンのいくつかのイラストを見ても、その詳しい構造はよくわからない。いずれにしてもサイレンが警報用になったのはずっと後のことなのである。もう一つ、この引用文のふるっている点は、冒頭の「サイレンは今ではあらかじめ危険を予告して甲高い声を上げているが、その名はかつて妙なる歌声によって人を危険と破滅に陥れたセイレーンたちのことを喚起させる。」という指摘である。つまり今日の「サイレン」が「セイレーンたち」とは逆に「はじめから危険を予告するもの」になってしまった意味変化の皮肉をこの本の著者は鋭く看破しているのである。ところで、同じことでも詩人の John Cialdiに言わせると、また少しニュアンスが違ってくる。チアルディには遺著ともいふべき語源の本 *A Browser's Dictionary* とその続編に当たる *A Second Browser's Dictionary* があるが、後者の *siren* の項の 3 の中で「サイレンの用途を警報用に変えたひょうきん者は、身に迫る〈危険〉と言うことを念頭に置いたのであろうが、頭の中ではバンシーのことを考えていたに違いない。」と言っている。(ちなみにバンシーとは泣いて家族の中の死者を予告するアイルランド・スコットランドの女怪であり、アイルランド版『遠野物語』とも称すべき、イェーツの *The Celtic Twilight* の中にも言及されている。)

3 An air-raid warning signal. [Did not occur in this sense until 1939, the beginning of WW II in England. Perhaps with antecedents in factory tooters, the British developed a device consisting of a whirling perforated metal drum into which air or steam could be forced under pressure to produce a wailing, whistling, penetrating sound. The wag who bent *siren* to this service had the idea “danger” on his side, but he must have been thinking of the banshee.] (John Cialdi: *A Second Brower's Dictionary*)⁹⁰
 (下線筆者)

一方 blurb (本のカバーや帯に印刷された出版社による宣伝文)に「シップレーに脱帽」Hats off to Joseph Shipley! とまで絶賛された Joseph T. Shipley の『英単語の起源』はたしかに著者の博識ぶりを遺憾なく発揮した大著であるが、その tuer II (印欧語根 tuer その II の意) の項にも同工異曲の記述がある。

tuer II: grasp, seize; hold; hard. Gk *siren*: she that seizes when victims are drawn to her alluring song, has degenerated to the warning shriek of the alarm siren. —(Joseph T. Shipley, *The Origins of English Words*)⁹⁰

引用文 1 行目の hold; hard は hold hard の誤植であろう。なお、このあと数行先に シップレー は、さらに語を継いで「サイレン」をめぐっていかにも博識な彼らしい所感をつづっている。

“What song the Syrens sang, or what name Achilles assumed when he hid himself among women, though puzzling questions, are not beyond all conjecture” —Sir Thomas Browne, *Hydriotaphia: Urne Buriall* (1658), 5.

Of Browne's book, *The New Century Handbook of English Literature* (1967) states: “Succeeding generations of critics have continued to commend it as an example of nearly flawless English prose ” ; but I have yet to find any of the conjectures as to “what song the Syrens sang. ” The only human who heard the

song and survived was Odysseus, who had his crew tie him to a mast so that he would not seek to swim to the sweet and fatal siren. (ibid.)

たしかにシップレーが引用している Sir Thomas Browne (17世紀のイギリスの医師、著述家)の警句は、Poeも名作 *The Murders in the Rue Morgue* 『モルグ街の殺人』の冒頭に掲げているくらいで、¹³その出典である *Hydriotaphia: Urne Buriall* 『壺葬論』は修辭的散文の極致とされているのである。

注

- (1) 短編集 *The Lottery*, (Popular Library 刊) 所収
- (2) Routledge & Kegan Paul, 1979
- (3) ITMA show に関してはブルワーの『故事伝説辞典』にかなり詳しい説明が出ている。それによれば、ITMAとは It's That Man Againの略であり、第2次大戦中の灯火管制の時代、人の心にあかりをともした人気ラジオ番組であったという。筆者は先年イギリス留学中に、70代のロンドナーである宿の care taker (管理人) Ron Jepsonに「この番組のことを知っているか」と尋ねてみたことがある。彼は初めてイギリスに来たという日本人が昔のラジオ番組のことを知っているのに驚いたが、「ITMA show ならたしか録音テープを BBCが発売しているはずだ。」と教えてくれた。
- (4) Harper & Row, 1980
- (5) Grolier, 1965
- (6) 彩流社, 1994
- (7) Houghton Mifflin Company
- (8) Cassel, 1970
- (9) Oxford University Press, 1974
- (10) Houghton Mifflin Company, 1986
- (11) Harper & Row, 1983
- (12) The Johns Hopkins University Press, 1984
- (13) 『モルグ街の殺人』は、名探偵 Dupinデュパンがその推理力の冴えをまざまざと見せつける物語である。したがって巻頭に掲げられたこのエピグラムはいかにもこの短編の内容にふさわしいのである。

O u t o f M y E t y m o l o g i c a l F i e l d N o t e s 2

Yoji Kawano

This is the continuation of the essay on etymology which was published in the same bulletin last academic year. Some valuable informations concerning etymology have been collected by the author from various sources, such as friends' talks, newspapers, Japanese books and British and American dictionaries. Comments by the author have been added to the citations in each chapter. The individual items are arranged in alphabetical order: *After you, my dear Alphonse* (a catch phrase originated in an old American comic strip); What do they call a *beeper* in Chinese?; *Gauche the Cellist* (the derivation of the main character's name in one of Kenji Miyazawa's stories); *Parthenope* (the old name of Naples) and *siren* (How has the fabulous monster come to mean a device for alarm signal?)